

略詞がたきもがなと思ふ折、亡友某忽然と來にけり、予あやしみて、子は曩に身まかり給ひぬと聞たるに、今訪る、ことこゝろ得がたしいかなる故やあると問ば、友のいはく、その事に侍り、けふなん冥府放赦の日なれば、吾們たま〜遊行を許さる、いざ給へ黄泉の光景を見せまゐらせんと、いふ予遽しくこれと共にゆく程に、前程いくそばくそをしらす、又絶て東西をしらす、遂に忽地友に後れて、ます〜こゝち惑ひにけり、山を踰水を涉り、ゆき〜て見かへれば、道次に官舎あり、門前に筵布わたしたる上坐に、媪ひとりみつわぐみてをり、ちかくなる隨に、これを見れば、荆婦が養母會田氏なり、外姑は寛政七年四月廿九日没したり○下略

〔日本書紀神武〕戊午年六月、時彼處有人、號曰熊野高倉下、忽夜夢、天照大神謂武甕雷神曰、○中時武甕雷神登謂高倉下、○下原脱、據一本補、下同曰、予劍號曰神靈、神靈此云也、今當置汝庫裏、宜取而獻之天孫高倉下曰、唯唯而寤、

〔本朝法華驗記中〕第七十二光空法師

兵部其夜夢見、有金色普賢、乘白象王、普賢腹間立多箭、兵部平公夢中間、以何因緣、普賢菩薩御腹立此多箭哉、答言、汝於昨日、依無實事、殺持經者、代其沙門、我受此箭、兵部夢覺、彌大驚怖、

〔更科日記〕天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所のやのつまのには、阿彌陀佛たち玉へり、さだかには見えたまはず、霧ひとへへだ、れるやうにすきて見え玉ふを、せめてたえまに見奉つれば、蓮花の座のつちをあがりたる、たかさ三四尺、ほとけの御たけ六尺ばかりにて、金色にひかりかゝやき玉ひて、御手かたつかたをばひろげたるやうに、いまかたつかたには、ゐんをつくり玉ひたるを、こと人のめにはみつつけ奉つらず、我一人見たてまつりて、さすがにいみじく氣おそろしければ、すだれのもとちかくよりても、え見奉つらねば、佛はこのたびは歸て後、むかへこんとの給ふ聲、わがみ、ひとつにき、いで、人はえき、つけすとみるに、うちおどろきたれば